



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第16主日 C年 (2022年7月17日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 18章1—10a節

第二朗読：コロサイの信徒への手紙 1章24—28節

福音朗読：ルカによる福音書 10章38—42節

心を亡くす

第一朗読では1節にある「マレムの^{かし}榿の木」に注目してください。アブラム(アブラハム)は弟ハラ
ンが死に、父テラも死んで、自分には^{あとつ}跡継ぎがないという状況で人生に途方に暮れた時、神と出会
います(12章)。神の^{しゆくふく}祝福とことばに^{しんらい}信頼をおいて家^すを捨て、生まれ故郷^{こきょう}を後^{あと}にして、神が^{しめ}示す土地に
向けて^{とうちやく}旅立ちます。到着したところがヘブロン地方の^{てんまく}マムレという土地です。「アブラムは^{うつ}天幕を移し、
ヘブロンにあるマムレの^{ちからづよ}榿の木の所^{かたわ}に来て、その傍^おらに^つ落ち着いた」(13章18節)。マムレには力強
いという意味があるとされています。榿の木は^{かんじょう}頑丈さを象徴する木でもあります。^{かみなり}雷を避けるため
に榿の木の近く^{この}に人々は好んで^あ住んだそうです。榿の木がもたらす^{あんそく}木陰は安息を、その実^みドングリは
食料、いのちの糧^{かて}をアブラハムに^{あた}与えてくれました。榿の木は神のもとで生きるアブラハムの生活
を象徴するものなのです。

第二朗読は『コロサイの信徒への手紙』からです。ローマで^{ごくちゆう}獄中^{ごくちゆう}にあったパウロのもとに、コロサ
イの教会の^{じつじょう}実状^{じつじょう}を知らせる手紙がエパfrasからもたらされます(1章7節)。当時のコロサイの教会は、
パウロが^{つた}伝えた福音とはかけ^{はな}離れた^{みりよう}教えに^{たく}魅了^{ぎろん}されていました。それは、「^{たか}巧みな^{ざろん}議論」(2章4節)、「人
間の^{てつがく}言い伝えに^あすぎない^あ哲学、つまり、^あむなしい^あだまし事」(2章8節)と呼ばれるものでした。コロ
サイの信徒達に^か欠けていたのは、^{くなん}キリストの^せ苦難を自分の身に^せ背負うことだったのです。そこで今日
の朗読箇所にある「^{かしよ}キリストの^あ苦しみの^あ欠けたところ」(24節)が生きてきます。

これを、^{しの}キリストが^あ忍んだ^あ苦しみという意味で^{りかい}理解^あしてしまうと、^{ふそく}キリストの^あ苦難は^あ不足^あしていて、
その不足分^あをパウロが^あ補うこと^あになります。しかし、^あ救い^あをもた^あらすために^あ主イエス・キリストが^あ忍
んだ^あ苦しみは^あ完全^あであるはず^あです。キリストにおける^あ苦難、^あすなわち^あキリストにおいて^あわたしたちが^あ忍ば
なければ^あならない^あ苦難と^あ理解^あすると^あよい^あでしょう。主イエス・キリストの^あ忍んだ^あ苦難^あに^あ倣^あって、^あ教会共

同体を築きあげるために必要な人間側の苦難がまだ欠けていると捉えたら分かりやすいと思います。

福音朗読は引き続きイエスがエルサレムへと向かう旅の途中の出来事です。律法の専門家の質問、「どうすれば、永遠の命を得ることができますか」(10章25節、先週の福音の箇所)に対する答えは「神である主を愛せよ、また隣人をあなた自身のように愛せよ」(27節)でした。先週の福音の「善きサマリア人」のたとえでは隣人への愛が具体的に説明されています。今週の福音では「マルタとマリア」によって「神を愛する」ことが示されます。このふたつの物語によって「永遠の命」への道が示されます。

38節の「迎え入れた」に注目してください。当時のユダヤ人社会では、男性が親族以外の女性と一対一で接したり、女性が男性を家に迎え入れてもてなしたりすることは普通のことではなかったそうです。スキャンダラスなことだったようです。イエスさまを迎え入れたのは、習慣に反したマルタの方でした。つまり、マルタにはイエスさまを迎え入れ、イエスさまのそばにいたいとの想いがあったのです。

そして40節にあるマルタの様子を描く「せわしく立ち働く」が印象的です。ギリシア語では「ペリスパオー」ですが、「周囲に」を表す接頭辞「ペリ」に「引き離す」を表す「スパオー」が結びついた動詞です。元々の意味は「あるべき中心から周りの方へと引き離されている」ことを表すそうです。そこから、その人の注意や関心があることから、別のことへ向くという意味が生じます。マルタの心の中心にあったのはイエスさまのそばにいて、イエスさまから教えをいただきたい、でした。しかし、いつの間にか関心が、イエスさまへのもてなしへと移ってしまったのです。

説教 リバスの思い出

この福音の箇所に出会うたびに、亡くなったイシドロ・リバス師を思い出します。だいぶ前のことですが、ある日の日曜日に麴町教会(イグナチオ教会)の夕方のミサに出席しました。司式はリバス師でした。「忙しいとは心を亡くすと書きます。マルタは、心を亡くしてしまったのです。心を亡くさないようにしましょう。」みたいな説教でした。なるほどと感心しました。忙しいは、りっしんべんに亡くすと書きます。りっしんべんは心という字からできあがった漢字の偏です。うまいこと言うなと思いました。

しかし、ミサにあずかっていて次第に気がつきました。「心を亡くしている」のはリバス師自身ではないか? と。なんとも精彩に欠けた表情でした。一言でいえば、つまらなそうにミサをしていたのです。

リバス師は人生の最期まで心の病気で苦しまれた方でした。あの夕方のミサで「忙しいとは、心を亡くすと書きます。実はわたしも心を亡くし、心ここにあらずです。でも、このミサの中で一緒にいてくださるイエスさまに信頼してまいりましょう。」とでも語っていたら、またミサの様子も変わった、深いものになっていただろうと思います。でも、言えなかったんでしょうね。